

身体拘束等の適正化のための指針

社会福祉法人 恵仁福祉協会

1. 身体拘束等の適正化に関する基本的考え方（事業所における身体拘束等の適正化のための指針）

身体拘束は、利用者の生活の自由を制限するものであり、利用者の尊厳ある生活を阻むものです。当事業所では利用者の尊厳と主体性を尊重し、拘束を安易に正当化することなく職員一人ひとりが身体的・精神的弊害を理解し、拘束廃止に向けた意識を持ち、身体拘束をしないケアの実施に努めます。

(1) 介護保険指定基準の身体拘束等禁止の規定

サービス提供にあたっては、当該利用者又は他の利用者等の生命又は身体を保護するため緊急やむを得ない場合を除き、身体拘束その他の利用者の行動を制限する行為を禁止しています。

(2) 緊急・やむを得ない場合の例外三原則

利用者個々の心身の状況を勘案し、疾病・障害を理解した上で身体拘束を行わないケアの提供をすることが原則です。しかしながら、以下の3つの要素のすべてを満たす状態にある場合は、必要最低限の身体拘束を行うことがあります。

① 切迫性

利用者本人または他の利用者等の生命又は身体が危険にさらされる可能性が著しく高いこと

② 非代替性

身体拘束その他の行動制限を行う以外に代替する介護方法がないこと。

③ 一時性

身体拘束その他の行動制限が一時的なものであること。

※身体的拘束を行う場合には、以上三つの要件を全て満たす必要があります。

2. 身体拘束等の適正化の推進のために必要な基本方針

(1) 身体拘束等の原則禁止

当事業所においては、原則として身体拘束及びその他の行動制限を禁止します。

(2) やむを得ず身体拘束等を行う場合

本人又は他の利用者の生命又は身体を保護するための措置として

緊急やむを得ず身体拘束等を行う場合は身体拘束等適正化検討委員会を中心に十分検討を行い、身体拘束等による心身の損害よりも、拘束をしないリスクの方が高い場合で、切迫性・非代替性・一時性の3要件の全てを満たした場合のみ、本人又は家族への説明同意を得て行います。

また身体拘束等を行った場合は、その状況についての経過記録を行えるだけ早期に拘束を解除すべく努力します。

(3) 日常ケアにおける留意事項

身体拘束等を行う必要性を生じさせないために、日常的に以下のことに取り組みます。

- ① 利用者主体の行動・尊厳ある生活に努めます。
- ② 言葉や対応等で利用者の精神的な自由を妨げないように努めます。
- ③ 利用者の思いを組みとり、利用者の意向に沿ったサービスを提供し、多職種共同で個々に応じた丁寧な対応をします。
- ④ 利用者の安全を確保する観点から、利用者の自由（身体的・精神的）を安易に妨げるような行動を行いません。万一やむを得ず安全確保を優先する場合、身体拘束等適正化検討委員会において検討します。
- ⑤ 「やむを得ない」と拘束に準ずる行為を行っていないか、常に振り返りながら利用者に主体的な生活をして頂ける様に努めます。

3. 身体拘束等適正化に向けた体制

(1) 身体拘束等適正化検討委員会の設置

当事業所では、身体拘束等の適正化に向けて身体拘束等適正化検討委員会（部会内）を設置します。

① 設置目的

事業所内での身体拘束等の適正化に向けての現状把握及び改善についての検討

身体拘束等を実施せざるを得ない場合の検討及び手続き

身体拘束等を実施した場合の解除の検討

身体拘束等適正化に関する職員全体への指導

② 身体拘束等適正化検討委員会の構成員

ア) 管理者

イ) 所属長

ウ) 医師（必要時）

- エ) 看護職員
- オ) 生活相談員
- カ) 介護支援専門員
- キ) 機能訓練指導員（必要時）
- ク) 介護職員
- ケ) 栄養士（必要時）
- コ) 常務理事（責任者）

※ この委員会のリーダーは委員長とし、その時参加可能な委員で構成する

③ 身体拘束等適正化検討委員会の開催

- ・ 定期開催します。（3 か月に 1 回以上の開催）
- ・ 必要時は随時開催します。
- ・ 急な事態（数時間以内に身体拘束等を要す場合）は、生命保持の観点から多職種共同で委員会に参加できない事が想定されます。その為、意見を聞くなどの対応により各スタッフの意見を盛り込み検討します。

4・やむを得ず身体拘束等を行う場合の対応

本人又は利用者の生命又は身体を保護する為の措置として緊急やむを得ず身体拘束等を行わなければならない場合は、以下の手順に従って実施します。

<介護保険規定基準において身体拘束禁止の対象となる具体的な行為>

- (1) 徘徊しないように、車椅子やイス・ベッドに体幹や四肢をひも等で縛る。
- (2) 転落しないように、ベッドに体幹や四肢をひも等で縛る。
- (3) 自分で降りられないように、ベッド柵（サイドレール）で囲む。
- (4) 点滴・経管栄養等のチューブを抜かないように、四肢をひもなどで縛る。
- (5) 点滴・経管栄養等のチューブを抜かないように、又は、皮膚をかきむしらないように、手指の機能を制限するミトン型の手袋等をつける。
- (6) 車椅子・椅子からずり落ちたり、立ち上がったりにしないように、Y字型拘束帯や腰ベルト、車いすテーブルをつける。
- (7) 立ち上がる能力のある人に立ち上がりを妨げるような椅子を使用する。
- (8) 脱衣やオムツはずしを制限するために介護衣（つなぎ服）を着せる。
- (9) 他人への迷惑行為を防ぐ為に、ベッドなどに体幹や四肢をひも等で縛る。
- (10) 行動を落ち着かせるために、抗精神薬を過剰に服用させる。
- (11) 自分の意志で開けることのできない居室等に隔離する。

① カンファレンスの実施

緊急やむを得ない状況になった場合、身体拘束等適正化検討委員会を中心として各関係部署の代表が集まり、拘束等による利用者の心身の損害や拘束をしない場合のリスクについて検討し、身体拘束等を行うことを選択する前に①切迫性②非代替性③一時性の3要素の全てを満たしているかどうかについて検討・確認します。

要件を検討・確認した上で身体拘束等を行うことを選択した場合は、拘束の方法、場所、時間帯、期間等について検討し、本人家族に対する説明書を作成します。

また、廃止に向けた取り組み改善の検討会を早急に行い実施します。

② 利用者本人や家族に対しての説明

身体拘束等の内容・目的・理由・拘束時間又は時間帯・期間・場所・改善に向けた取り組み方法を詳細に説明し、十分な理解が得られるように努めます。

また、身体拘束等の同意期限を超え、なお拘束を必要とする場合については、事前に契約者・家族等と行っている内容と方向性、利用者の状態などを確認説明し、同意を得た上で実施します。

③ 記録と再検討

法律上、身体拘束等に関する記録は義務付けられており、専用の様式を用いてその様子・心身の状況・やむを得なかった理由などを記録する。身体拘束等の早期解除に向けて、拘束の必要性や方法を随時検討します。その記録は2年間保存、行政担当部局の指導監査が行わせる際に提示できるようにします。

④ 拘束の解除

③の記録と再検討の結果、身体拘束等を継続する必要がなくなった場合は、速やかに身体拘束等を解除します。その場合には、契約者、家族に報告致します。

尚、一旦その状況から試行的に身体拘束等を中止し必要性を確認する場合がありますが、再度数日以内に同様の対応で身体拘束等による対応が必要となった場合、ご家族（保証人等）に連絡し経過報告を実施するとともに、その了解のもと同意書の再手続なく生命保持の観点から同様の対応を実施させていただきます。

5. 身体拘束等適正化に向けた各職種の役割

身体拘束等の適正化のために、各職種の専門性に基づくアプローチから、チームケアを行うことを基本とし、それぞれの果たすべき役割に責任をもって対応します。

(委員長)

- 1) 委員会の招集、開催資料作成、司会進行

(管理者) (所属長)

- 1) 身体拘束等適正化検討委員会の統括管理
- 2) ケア現場における諸課題の統括責任者
- 3) 身体拘束等適正化に向けた職員教育

(医師)

- 1) 医療行為への対応
- 2) 看護職員との連携

(看護職員)

- 1) 医師との連携
- 2) 事業所における医療行為範囲の整備
- 3) 重度化する利用者の状態観察
- 4) 記録の整備

(生活相談員・介護支援専門員)

- 1) 医療機関、家族との連絡調整
- 2) 家族の意向に添ったケアの確立
- 3) 施設のハード・ソフト面の改善
- 4) チームケアの確立
- 5) 記録の整備

(栄養士)

- 1) 経鼻・経管栄養から経口への取り組みとマネジメント
- 2) 利用者の状態に応じた食事の工夫

(介護職員)

- 1) 拘束等がもたらす弊害を正確に認識する
- 2) 利用者の尊厳を理解する
- 3) 利用者の疾病、障害等による行動特性の理解
- 4) 利用者個々の心身の状態を把握し基本的ケアに努める
- 5) 利用者とのコミュニケーションを充分にとる
- 6) 記録は正確かつ丁寧に記録する

(常務理事)

- 1) 専任の身体拘束等の適正化対策担当者

2) ケア全般の責任者

6. 身体拘束等適正化のための職員教育・研修

介護に携わるすべての従業員に対して、身体拘束等適正化と人権を尊重したケアの励行を図り職員教育を行います。

- ① 定期的な教育・研修（年2回以上）の実施
- ② 新任者に対する身体拘束等適正化のための研修の実施
- ③ その他必要な教育・研修の実施

7. 事業所内で発生した身体拘束等の報告方法等のための方策に関する基本方針

身体拘束等適正化検討委員会にて報告をまとめ、法人内の毎月開催される全職員の全体会議にて報告する。また、利用者、家族に対しては各事業所内の確認しやすい場所に掲示するか閲覧可能な形のファイル等で備えおくこと。

8. 利用者等に対する当該指針の閲覧に関する基本方針

当法人の身体拘束等適正化に関する指針を、各事業所内の確認しやすい場所に閲覧可能な形のファイル等で備えおくこと。

附則

この指針は平成24年4月1日から施行する。

（平成30年4月1日一部改正）

この指針は平成30年4月1日から施行する。

（令和3年4月1日一部改正）

この指針は令和3年4月1日から施行する。